

保育・教職養成大学学生の読書行動と読書量 ——作家名再認テストを用いた測定の試み——

Reading Behavior and Reading Amount on Undergraduates in Teacher / Nursery Training
Course: Measuring Exposure to Narrative With the Author Recognition Test.

小山内 秀和

1. 目的

読書に多くの効果があることは、さまざまな分野で指摘されている。教育の分野においては、小学校、中学校の各学年の国語科に「読む」という単元がある(文部科学省, 2008)。また、幼稚園教育要領、保育所保育指針においても、それぞれその内容に「言葉」という項目が盛り込まれ、子どもの発達に応じて、絵本や紙芝居、物語などに触れることが記されている(厚生労働省, 2017; 文部科学省, 2017)。こうした読書活動の支援、指導が保育士や教職に期待されているのであれば、その養成課程においては、子どもに対する指導法を教授するだけでなく、養成課程に属する学生自身の読書活動を把握し、それに基づいた読書の指導や支援をすることも重要であると考えられる。

読書活動についてはこれまで、主に大学生を対象に読書量を測定する研究が行われてきた。そのなかで、読書が言語能力を伸ばす効果を持つことや(Mar & Rain, 2015; Mol & Bus, 2011)、他者の心的状態を推測したり共感したりする能力と関連すること(Djicic, Oatley, & Moldoveanu, 2013; Mar, Oatley, Hirsh, dela Paz, & Peterson, 2006; Mar, Oatley, & Peterson, 2009)などが指摘されている。また、読書活動を支える要因としての動機づけについても尺度評定や自由記述によって調査され(Greaney & Neuman, 1990; Schiefele, Schaffner, Möller, & Wigfield, 2012)、読書を促進する要因として内発的動機づけの重要性が指摘されている(Schaffner & Schiefele, 2013)。

しかしながら、保育、教職課程の学生における読書活動についての報告は少ない。Arici (2008) は、トルコにおける教職課程学生の読書行動について報告している。Arici によれば、学生の1年間の読書冊数はおおよそ6冊から20冊と、UNESCOの指標における「intermediate reader」に当たるが、多くの学生が読書時間に満足できていないと報告している。一方、Applegate & Applegate (2004) は、アメリカの教職課程における学生の読書に対する姿勢について探索的な調査を行い、54.3パーセントの学生は読書に対して積極的な姿勢を持っていないことを明らかにした。彼らによれば、子どもたちと読書の楽しさを共有することが期待できる姿勢を持つ学生は、25.2パーセントに過ぎなかったと報告している。このように、数少ない海外のデータにおいても、学生の読書姿勢が課題となっていることがうかがえる。

わが国における大学生を対象とした読書行動のデータとしては、平山 (2015) による、2006 年と 2012 年の調査を比較した研究がある。それによれば、1 ヶ月の読書冊数が 0 冊と回答した割合である「不読率」は、2006 年で 33.6 パーセント、2012 年で 40.1 パーセントであり、大学生における読書離れが進行していることが示唆されている。また平山は、読書の動機づけについて、自己研鑽を挙げた割合は低下する一方、言語技能のためと答えた割合は増加するというように、読書行動を支える背景の変化も指摘している。

保育士、教職課程における調査としては、小島 (2016) が、大学生の生活実態について行った包括的調査のデータがある。それによれば、73.7 パーセントの学生は、1 日当たりの読書時間が 30 分未満と回答している。より詳しいデータとして、長谷部 (2010) は、教員養成課程の大学生における自己教育力について調査を行うなかで、読書の好悪と高校在学時の読書冊数について調査を行っている。その結果、読書が「好き」「大好き」と答えた学生は 40 パーセントであり、読書量に関しては、高校在学中にまったく本を読まなかった学生は 5.2 パーセント、1 年間に 1 冊以下の読書量である学生は 32.5 パーセントであったと示されている。しかしながら、読書時間や読書冊数など詳細なデータを報告している研究は少ない。平山 (2017) は、保育士課程における大学生の読書量を、1 日あたりの分数、1 週間あたりの日数、1 ヶ月あたりの冊数など、さまざまな指標を用いて検討を行っている。その結果、不読率はそれぞれ 60.7、56.1、47.2 パーセントであったが、調査の方法によって回答傾向にばらつきのあることを指摘している。

読書量の測定については、これ以外にも日誌法や図書館などでの貸し出し数といったさまざまな指標があるが (猪原・上田・塩谷・小山内, 2015)、近年では直接冊数や時間を測定するのではなく、活字や物語への暴露量 (print exposure, narrative exposure) を推定する再認テストによって測定するという手法が多く用いられている。再認テストには、成人用に作成された作家名再認テスト (Author Recognition Test: ART; Stanovich & West, 1989) や、子どもを対象としたタイトル再認テスト (Title Recognition Test: TRT; Cunningham & Stanovich, 1990) がある。これらは、作家名または作品タイトルのリストを参加者に呈示し、作家あるいは作品として知っている項目をすべて選択してもらうというものである。ただし、このリストには、実在する作家名やタイトルだけでなく実在しない名前やタイトルも混在している。実在する項目を選択した数 (正反応数) から実在しない項目を選択した数 (エラー数) を減じた値は「ART 得点 (または TRT 得点)」と呼ばれ、回答者がそれまでにどれくらい文章や物語に触れてきたかの相対的個人差を反映しているとされている。

再認テストは、冊数や時間などを自己報告する方法とは異なり、社会的望ましさなどによる回答のゆがみが小さい。そのため、より客観的な読書量指標として多くの研究で用いられている (Mol & Bus, 2011)。また、ART 得点は実際の読書行動と関連することが確かめられており (Rain & Mar, 2014; West, Stanovich, & Mitchell, 1993)、構成する項目についても計量心理学的な検討が加えられたり、改訂版が作成されたりしている (Masterson & Hayes, 2007;

Moore & Gordon, 2014)。日本語版のテストとしては、児童用の TRT (猪原他, 2015) と、大学生以上の一般用の ART (小山内・米田・古見・楠見, 2015) が作成されている。これらはいずれも物語読書量を測定するものとして作成されており、それぞれ主観的読書量との関連が検討されている。その結果、TRT については妥当性に疑問が残る一方、ART は自己報告による読書頻度や読書冊数との関連が確認されている (猪原他, 2015; 小山内他, 2015)。

以上のように、読書行動や読書量を測定する研究は国内外で数多く行われているが、保育士養成あるいは教員養成課程の学生の読書実態については、あまりデータが蓄積されていないのが現状である。また、簡便かつ客観的な読書量推定指標とされる再認テストを用いた調査は、わが国ではほとんど行われていない。

そこで本研究は、次の二つの点を明らかにするための調査を行う。第 1 に、保育、教育職を目指す学生の読書量についてさまざまな指標から測定し、保育、教職養成課程に属する大学生の読書行動について、その特徴を明らかにすることである。第 2 に、読書量を推定するための指標として海外で広く用いられている再認テストを用いて、その妥当性を検討することである。これらを明らかにすることによって、現代の大学生の読書と読書を取り巻く環境について、より簡便かつ的確に把握する方略を探るとともに、保育職、教職を目指す学生の読書支援における基礎的データを得ることができよう。

2. 方法

2-1. 調査参加者

保育士、教員養成課程の学生 80 名 (女性 52 名、男性 25 名。平均年齢 18.5 歳、標準偏差 3.23、年齢未記入者 6 名、性別未記入者 3 名を含む) が調査に参加した。

2-2. 調査項目

調査では、以下の四つの項目を用いて、参加者の読書行動について調査を行った。

1) **作家名再認テスト** 小山内他 (2015) が作成した日本語版作家名再認テスト (ART-J) を用いた。これは、Stanovich & West (1989) の ART と同じ形式と得点算出方法による読書量推定指標であり、実在する作家名 52 項目と実在しない作家名 52 項目の計 104 項目で構成されている。参加者は、これらの項目のうち「作家として知っている」項目をすべて選択するよう教示された。

2) **余暇活動の頻度調査** 小山内他 (2015) に従い、読書行動とそれに関連すると思われる余暇活動について、直近 6 ヶ月の活動頻度を尋ねた。項目は、「小説や文学作品などの物語」、「詩歌」、「マンガ」、「物語、詩歌、マンガ以外の本」、「新聞」、「小説雑誌」、「マンガ雑誌」、「小説雑誌、マンガ雑誌以外の雑誌」、「テレビドラマ」、「テレビアニメ」、「映画」の 11 項目であり、それぞれに「5 : 毎日」「4 : 週 1 回以上」「3 : 月 1 回以上」「2 : たまにする」

「1：しない」までの5段階で評定してもらった。このうち前半4項目については、電子書籍による読書も含めた頻度を報告してもらった。

3) 読書冊数調査 2) の余暇活動頻度項目のうち、「小説や文学作品などの物語」、「詩歌」、「マンガ」、「物語、詩歌、マンガ以外の本」の4項目について、過去1ヶ月で読んだ冊数を記入してもらった。なお、この冊数には電子書籍も含めた数値を回答するよう教示した。

4) 電子書籍の利用度調査 3) で尋ねた4項目について、電子書籍で読む程度を尋ねた。ケータイ小説や電子書籍などを「紙以外の本」として、「1：すべて『紙の本』で読む」から「5：すべて『紙以外の本』で読む」までの5段階から評定してもらった。ただし、中点にあたる選択肢は「3：どちらも同じくらいの割合で読む」とした。

なお、2) および3) の評定は、平山 (2017) の調査によって回答難易度が比較的低いとされた調査項目となるよう構成した。

2-3. 手続き

ART-J は 2017 年前期授業の講義時に、それ以外の調査項目については同年後期授業の講義時に、それぞれ集団で実施した。参加者は、それぞれの授業時間終了後に調査冊子を配布され、回答を行った。

2-4. 倫理的配慮

参加者のインフォームドコンセントの機会を確保するため、調査冊子の表紙に 1) 調査が強制ではなく、回答しない場合にもいかなる不利益も受けないこと、2) 調査に参加したことによる身体的、心理的負担は極めて少ないこと、3) データは匿名化された上で統計的に分析が行われ、個人情報として厳重に管理されること、4) 研究結果の公開条件と、公開から 10 年間の保存期間が経過した時点ですべての元データが破棄されること、の 4 点を明記した。調査の際にはこれらの熟読を促した上で、同意した時にのみ回答を提出してもらえるように教示を行った。

3. 結果

それぞれの項目について、回答に欠損のあったデータを除外した。その結果、ART-J は 77 名を、その他の項目は 66 名を、それぞれ分析対象とした。

3-1. 自己報告指標の記述統計量

まず、余暇活動頻度、読書冊数について記述統計量を算出した。結果を Table 1 および table 2 に示す。まず、過去 6 ヶ月の余暇活動については、テレビドラマ、マンガ、映画、テレビアニメの順に頻度が高いという結果となった。小説については、多くの学生がたまに読む

Table 1 余暇活動頻度項目の記述統計量

項目	平均	SD	各選択肢の回答率 (%)				
			1	2	3	4	5
小説や文学作品などの物語	2.05	1.04	31.82	46.97	10.61	6.06	4.55
詩歌	1.23	0.60	81.82	16.67	0.00	0.00	1.52
マンガ	2.92	1.49	24.24	18.18	21.21	13.64	22.73
物語, 詩歌, 漫画以外の本	1.66	1.05	63.08	18.46	10.77	4.62	3.08
新聞	2.03	1.16	37.88	42.42	4.55	9.09	6.06
小説雑誌	1.36	0.76	56.06	28.79	6.06	7.58	1.52
マンガ雑誌	1.70	0.99	41.54	35.38	16.92	4.62	1.54
小説雑誌, マンガ雑誌以外	1.89	0.95	13.85	26.15	3.08	38.46	18.46
テレビドラマ	3.22	1.39	33.33	24.24	6.06	25.76	10.61
テレビアニメ	2.56	1.45	1.52	56.06	16.67	19.70	6.06
映画	2.73	1.00	31.82	46.97	10.61	6.06	4.55

注 1 : $N = 65 \sim 66$ 。

注 2 : 各項目の選択肢は次の通り。1 : しない, 2 : たまにする, 3 : 月 1 回以上, 4 : 週 1 回以上, 5 : 毎日。

Table 2 読書冊数項目の記述統計量

項目	平均	SD	最小値	最大値
小説や文学作品などの物語	1.45	2.48	0	10
詩歌	0.06	0.24	0	1
マンガ	6.03	13.12	0	80
物語, 詩歌, マンガ以外の本	0.98	2.15	0	15

注 : $N = 66$ 。

程度であり, 週に 1 度以上と日常的に読むと回答した学生は 10.6 パーセントのみであった。また, 詩歌についてはほとんどの学生が読んでおらず, 小説やマンガ以外の, いわゆるノンフィクションについても, 週に 1 度以上読む学生は 7.7 パーセントにとどまった。一方, マンガについては 36.4 パーセントの学生が週に 1 度以上読むと回答した。次に, 直近 1 ヶ月の読書冊数は, 小説やノンフィクションは平均 1 冊程度, マンガは 6 冊程度であることが示された。しかしながら, 小説を最大 10 冊読んだと回答した学生もいるなど, その冊数には大きなばらつきがあることもうかがえた。

Table 3 読書冊数項目における不読率

	物語	詩歌	マンガ	それ以外の本
0冊と回答した率 (%)	51.52	93.94	40.90	60.61

注：N = 66。

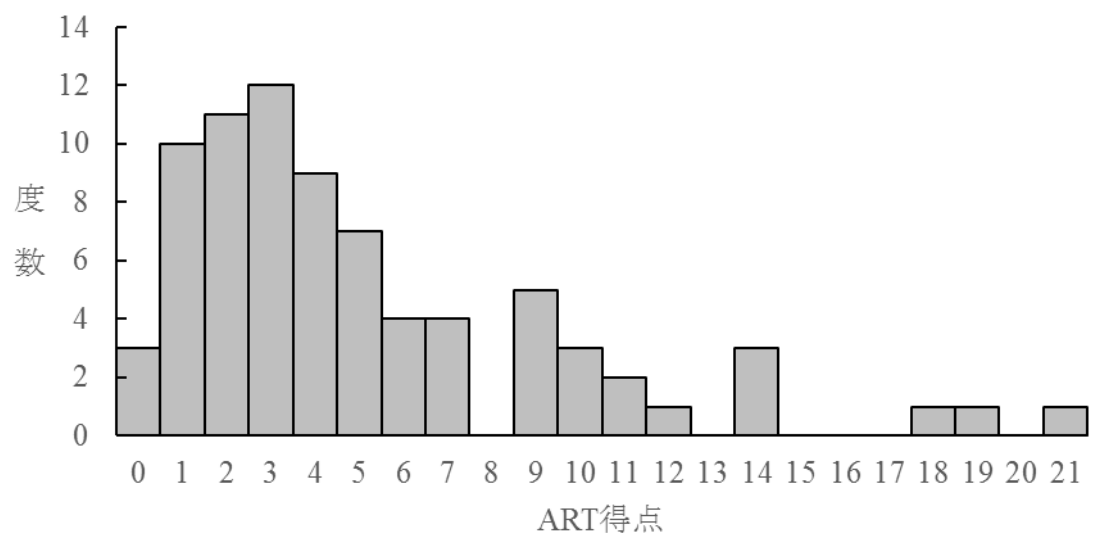


Figure 1 ART-Jの得点分布 (N=77)

3-2. 不読率

次に、まったく本を読まない学生の比率であるが、余暇活動頻度では1の「しない」を選んだ割合を、読書冊数では0冊と回答した割合を、それぞれ「不読率」として算出した。余暇活動頻度についてはTable 1に、読書冊数についてはTable 3に、それぞれ示す。これをみると、詩歌の不読率は80パーセントを大きく超えていた。余暇頻度と冊数での不読率は、たとえば小説については、余暇頻度で31.8パーセント、冊数で51.5パーセントと開きがあるが、前者が直近6ヶ月、後者が直近1ヶ月と、対象となる期間が異なっているためと考えられる。いずれにせよ、物語、ノンフィクション、漫画の順に、学生は不読率が高いことが示された。

3-3. ARTの得点傾向

次に、ART-Jについて、Stanovich & West (1989) にしたがってART得点を算出した。その結果、平均得点は5.19点 ($SD=4.51$)、中央値は4点となった。得点分布をFigure 1に示す。これをみると、得点は大きく0の方向へと偏った分布を示していることが分かる。

Table 4 ART 得点, 余暇活動頻度, 読書冊数の相関行列

項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
ART															
1 ART 得点	-														
余暇活動頻度															
2 物語	.15	-													
3 詩歌	.04	.17	-												
4 マンガ	.02	.44***	.07	-											
5 それ以外の本	.02	.20	.57***	.10	-										
6 新聞	.07	.26*	.32**	.09	.44***	-									
7 小説雑誌	-.22	.30*	.30*	.07	.20	.30*	-								
8 マンガ雑誌	-.06	.36**	.02	.38**	.22	.29*	.32**	-							
9 その他雑誌	.10	.23	.03	.22	.22	.14	.17	.21	-						
10 テレビドラマ	.25*	-.10	-.21	.00	-.15	.03	-.10	-.15	.07	-					
11 テレビアニメ	-.02	.17	-.10	.28*	-.13	.11	-.05	.14	-.16	.23	-				
12 映画	.15	.30*	.05	.29*	.12	.15	.14	.20	.01	.18	.52**	-			
読書冊数															
13 物語	.16	.62***	.06	.31*	.15	.24	.00	.32**	.17	-.11	.20	.29*	-		
14 詩歌	.19	.06	.52**	.06	.23	.15	.03	-.05	-.01	-.05	-.06	.07	.01	-	
15 マンガ	-.03	.36**	.03	.79***	.02	.18	.04	.24	.15	.07	.25*	.22	.35**	.12	-
16 それ以外の本	.02	.28*	.21	.05	.45***	.37***	.16	.41***	.46***	-.13	-.21	.05	.30*	.09	.08

注：N = 63~66。* : $p < .05$, ** : $p < .01$, *** : $p < .001$ 。

Table 5 各ジャンルの電子書籍利用率

項目	各選択肢の回答率 (%)				
	1	2	3	4	5
物語	52.38	34.92	7.94	1.59	3.17
詩歌	47.46	23.73	20.34	5.08	3.39
マンガ	38.46	15.38	21.54	20.00	4.62
それ以外の本	50.79	20.63	26.98	0.00	1.59

注1：各項目の選択肢は次の通り。1：すべて「紙の本」で読む，2：「紙の本」で読むほうが多い，3：どちらも同じくらいの割合で読む，4：「紙以外の本」で読むほうが多い，5：すべて「紙以外の本」で読む。ただし，「紙以外の本」は電子書籍を指す。

注2： $N = 59 \sim 65$ 。

3-4. 各指標間の関連

ART 得点, 余暇活動頻度, 読書冊数について, 相互の関連を検討するために相関係数を算出した。結果を Table 4 に示す。まず, 余暇活動頻度についてみると, 「物語」と「マンガ」, 「詩歌」と「それ以外の本」, 「新聞」と「それ以外の本」との間に中程度の相関が示された。これは, 学生にとって, 活字の物語とマンガが近いものとして体験されていることや, 新聞やノンフィクションといったジャンルはそれらとは異なるものとして捉えられていることを示している。また, 「テレビアニメ」と「映画」の間にも中程度の関連がみられたことから, 映像を媒体とした物語を楽しむグループの存在が考えられる。次に, 読書冊数では, 余暇活動頻度と同様に, 「物語」と「マンガ」との間に関連がみられた。そして, 余暇活動と読書冊数についてみると, 「物語」「詩歌」「マンガ」「それ以外の本」の項目間では高い相関を示した。このことから, 頻度と冊数という回答形式にかかわらず, 参加者は主観的な読書量の質問に対して一貫した回答をしたことがうかがえる。また, 余暇活動の「マンガ雑誌」と「その他の雑誌」は「それ以外の本」の読書冊数と, それぞれ関連することが示唆された。学生が, 雑誌から情報を得て物語以外の読書を行っていることが推測できる。

一方, ART と余暇活動, 読書冊数との関連であるが, 余暇活動頻度の「物語」との間で $r = .15$ という値を示したことを除けば, 読書に関連する主観報告得点との間で相関は見いだされなかった。唯一, 余暇活動頻度の「テレビドラマ」の視聴との間で弱い相関が見いだされている。この結果は, ART 得点が, 少なくとも読書の自己報告指標の分散を反映しなかったことを示唆している。

3-5. 電子書籍の利用度

最後に, 学生の電子書籍の利用度について集計を行った。結果を Table 5 に示す。これを見ると, 多くの学生は紙媒体で読書活動を行っていることが見てとれる。ただし, マンガに関してはやや電子書籍の利用率が高いという結果となった。また, 4 項目の評定値の合計得

点を算出し、中央値 (2.0 点) 以上を電子書籍利用高群、未満を低群として、ART 得点、余暇活動頻度、読書冊数について 2 群間比較を行うために t 検定を行ったが、いずれの指標でも有意な差は見いだされなかった ($ps > .2$)。

4. 考察

本研究は、保育、教職課程の学生を対象として、その読書行動の実態を明らかにすること、そして、より簡便な読書量推定指標である再認テストによって、学生の読書量を明らかにすることを目的として行われた。調査の結果、3 割の学生は過去 6 ヶ月で本を読んでおらず、また直近 1 ヶ月に絞っても、1 冊も本を読まなかった学生は半数を超えるなど、読書離れの実態が明らかになった。一方、再認テストである ART-J は、自己報告である活動頻度や読書冊数といった変数と有意な関連を示さず、指標間で一貫しない結果となった。

読書行動について、本研究の結果と先行研究を比較してみると、本研究で行った自己報告に基づく不読率は、頻度評定で 32 パーセント、読書冊数で 52 パーセントとなった。この数値は、平山 (2015) の報告した 2012 年の調査における、1 ヶ月の読書冊数を 0 と回答した不読者の率 (40.1 パーセント) よりも高くなっている。この調査は 2,000 名を超えるサンプルに基づいたものであり、今回の参加者は、全国平均よりも不読率が高い可能性が考えられる。また、平山 (2017) による 1 ヶ月の平均読書冊数は平均 1.02 冊から 1.80 冊であり、本研究における 1 ヶ月の読書冊数とほぼ同程度の値となっている。両調査では、本の定義が異なる可能性があるため単純な比較はできないが、おおむね「若者の読書離れ」を支持する結果であるといえるだろう。

自己報告調査からは、さらに細かな学生の読書行動について推測することができる。相関分析の結果、余暇活動頻度の「物語」と「マンガ」、「詩歌」と「それ以外の本」、「新聞」と「それ以外の本」それぞれの関連は、参加者が、活字の読書とマンガの読書のパタンが類似しているという読書行動の特徴を示していると考えられる。また、映画を見る頻度はテレビアニメと関連が見られたことも、同様に考えることができる。こうした行動特徴は、小説のマンガ化やアニメの映画化といったような、複数の媒体で同一作品を制作するという近年のメディアの動向も影響している可能性があるだろう。一方、小説やマンガ以外の本を読む頻度は、新聞や詩歌を読む頻度と関連することが示された。このいわゆるノンフィクションの読書行動は、物語を読む頻度やマンガを読む頻度との相関が比較的小さかったこととあわせて考えると、興味深い結果である。これは、物語の読書行動とそれ以外の読書行動とに関連が見られないことを意味する。むしろ、物語とノンフィクションとが全く異なるものとして参加者から認識されていたか、あるいは、それぞれの読者層が異なっているということも考えられる。大学生の読書行動を考える上で、そのジャンルを踏まえた検討を行っていくことが重要であろう。

ART-J の得点に関しては、小山内他 (2015) との比較を行うことができる。小山内他による大学生 300 名を対象とした調査では、得点の平均は 10.59、中央値は 7 点であり、今回の結果はそれよりもやや低い値となった。このことも、自己報告の結果と整合するものと考えられる。

しかしながら、この ART と、余暇頻度や読書冊数といった自己報告調査との間には、ほとんど関連が見られないという結果となった。これは、小山内他 (2015) が同様の調査において、物語を読む頻度との間に $r = .46$ 、物語読書冊数との間に $r = .30$ の相関を報告しているのとは矛盾する。これについては三つの可能性が考えられる。第 1 は、サンプルサイズの少なさにより、安定した結果が得られなかったという可能性である。これを検証するためには、さらに継続して同様の調査を行う必要がある。第 2 は、調査時期の問題である。本研究では、ART-J は年度の前期に、それ以外の調査は後期に、それぞれ行った。そのため、自己報告の得点が十分に ART 得点に反映されなかった可能性がある。この点については、両調査を同時期に行うことが解決策となるだろう。残る第 3 の可能性は、ART の妥当性である。これまで、ART は言語能力との関連が一貫して表れていることや (Mar & Rain, 2015; Mol & Bus, 2011; Ocal & Ehri, 2017)、実際の読書行動との関連も報告されていることから (Rain & Mar, 2014; West et al., 1993)、読書量推定指標として頻繁に利用されてきた。一方で、本の著者名を知っていることと読書量との理論的関連性が明確ではないという指摘もある (猪原他, 2015)。実際、猪原らは、児童用の TRT と主観的な読書量指標との間にあまり関連が見いだされなかったと報告している。また、日本語版独自の問題点として、ART-J は各項目の回答傾向について詳細な分析が行われていないという点がある。海外では、項目反応理論を用いた検討が行われるなどしており (Moore & Gordon, 2014)、ART-J でも同様の分析を行い、テスト自体の識別力などを検討する必要があるだろう。

本研究にはこのほかにもいくつかの課題が残されている。第 1 に、本研究では、学生の日常生活のうち読書以外の側面について調査を行っていない。平山 (2015) は、パソコンや携帯電話、テレビを見る頻度などを広く調査し、2006 年から 2012 年にかけて、テレビの視聴時間が減少する一方、携帯電話の利用時間が増加するといった変化を報告している。近年ではスマートフォンやタブレット端末といった、過去にはなかったデバイスも普及しており、学生の日常生活にかかる活動形態はさらに変化していることが予想される。学生の読書実態を明らかにするためには、読書以外の活動についても明らかにする必要がある。第 2 に、読書行動を多様な側面から明らかにすることの重要性である。これまでの読書研究では、読書頻度を主な指標として測定を行ってきた。しかしながら、人間の習慣化された行動を頻度だけで把握するのは難しい。Schmidt & Retelsdorf (2016) は、読書習慣を行動の反復性や個人のアイデンティティ感覚、自動化された行動といった側面から捉える新たな尺度を開発している。そうした試みは、学生の読書行動を包括的に捉えることに大きく寄与するであろう。

本研究の結果、保育・教職課程の学生の読書量は、他の大学生と同様に低い値を示した。特に、1ヶ月あたりの読書冊数は平均1冊程度であり、読書頻度についても30パーセント程度の学生は全くしないといった、読書離れが改めて明らかとなった。ただし、本のジャンルによってその幅は大きく変動することが予想される。また、再認テストによる読書量推定はわが国での更なる検討が必要である。こうしたデータを蓄積することで、保育・教職課程に所属する学生の読書支援をさらに拡充させていくことが望まれる。

引用文献

- Applegate, A. J., & Applegate, M. D. (2004). The Peter Effect: Reading habits and attitudes of preservice teachers. *Reading Teacher*, 57(6), 554–563.
- Arici, A. F. (2008). Pre-service teachers' reading tendencies: Implications for promoting reading. *American Journal of Applied Sciences*, 5, 645–652.
- Cunningham, A. E., & Stanovich, K. E. (1990). Assessing print exposure and orthographic processing skill in children: A quick measure of reading experience. *Journal of Educational Psychology*, 82, 733–740. doi: 10.1037//0022-0663.82.4.733
- Djikic, M., Oatley, K., & Moldoveanu, M. C. (2013). Reading other minds: Effects of literature on empathy. *Scientific Study of Literature*, 3, 28–47. doi: 10.1075/ssol.3.1.06dji
- Greaney, V., & Neuman, S. (1990). The functions of reading: A cross-cultural perspective. *Reading Research Quarterly*, 25, 172–195.
- 長谷部比呂美 (2010). 短期大学生の自己教育力に関する検討 (2) : 保育学生の自己教育力の推移 淑徳短期大学研究紀要, 49, 111-121.
- 平山祐一郎. (2015). 大学生の読書の変化 読書科学, 56, 55-64.
- 平山祐一郎 (2017). 読書量の測定方法に関する一考察 : 保育系大学生の読書教育に向けて 東京家政大学博物館紀要, 22, 53-62.
- 猪原敬介・上田紋佳・塩谷京子・小山内秀和. (2015). 複数の読書量推定指標と語彙力・文章理解力との関係 教育心理学研究, 63, 254-266. doi: 10.5926/jjep.63.254
- 小島正憲 (2016). 大学生における生活実態の調査報告 : 教員を目指す学生を対象として 東海学院大学研究年報, 1, 99-106.
- 厚生労働省 (2017). 平成29年告示 保育所保育指針 フレーベル館.
- Mar, R. A., Oatley, K., Hirsh, J., dela Paz, J., & Peterson, J. B. (2006). Bookworms versus nerds: Exposure to fiction versus non-fiction, divergent associations with social ability, and the simulation of fictional social worlds. *Journal of Research in Personality*, 40, 694–712. doi: 10.1016/j.jrp.2005.08.002
- Mar, R. A., Oatley, K., & Peterson, J. B. (2009). Exploring the link between reading fiction and empathy: Ruling out individual differences and examining outcomes. *Communications*, 34,

407–428. doi: 10.1515/COMM.2009.025

- Mar, R. A., & Rain, M. (2015). Narrative Fiction and Expository Nonfiction Differentially Predict Verbal Ability. *Scientific Studies of Reading, 19*, 419–433. doi: 10.1080/10888438.2015.1069296
- Masterson, J., & Hayes, M. (2007). Development and data for UK versions of an author and title recognition test for adults. *Journal of Research in Reading, 30*, 212–219. doi: 10.1111/j.1467-9817.2006.00320.x
- Mol, S. E., & Bus, A. G. (2011). To read or not to read: a meta-analysis of print exposure from infancy to early adulthood. *Psychological Bulletin, 137*, 267–296. doi: 10.1037/a0021890
- 文部科学省 (2008). 小学校学習指導要領. http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2010/11/29/syo.pdf (2017年12月3日閲覧)
- 文部科学省 (2017). 平成29年告示 幼稚園教育要領 フレーベル館.
- Moore, M., & Gordon, P. C. (2014). Reading ability and print exposure: item response theory analysis of the author recognition test. *Behavior Research Methods, 47*, 1095–1109. doi: 10.3758/s13428-014-0534-3
- Ocal, T., & Ehri, L. (2017). Spelling ability in college students predicted by decoding, print exposure, and vocabulary. *Journal of College Reading and Learning, 47*, 58–74. doi: 10.1080/10790195.2016.1219242
- 小山内秀和・米田英嗣・古見文一・楠見孝 (2015). 日本人大学生における読書量の測定 : 日本語版Author Recognition Testの作成 日本心理学会第79回大会発表論文集.
- Rain, M., & Mar, R. A. (2014). Measuring Reading Behavior: Examining the Predictive Validity of Print-Exposure Checklists. *Empirical Studies of the Arts, 32*, 93–108. doi: 10.2190/EM.32.1f
- Schaffner, E., & Schiefele, U. (2013). The prediction of reading comprehension by cognitive and motivational factors: Does text accessibility during comprehension testing make a difference? *Learning and Individual Differences, 26*, 42–54. doi: 10.1016/j.lindif.2013.04.003
- Schiefele, U., Schaffner, E., Möller, J., & Wigfield, A. (2012). Dimensions of Reading Motivation and Their Relation to Reading Behavior and Competence. *Reading Research Quarterly, 47*, 427–463. doi: 10.1002/RRQ.030
- Schmidt, F. T. C., & Retelsdorf, J. (2016). A new measure of reading habit: Going beyond behavioral frequency. *Frontiers in Psychology, 7*, 1364. doi: 10.3389/fpsyg.2016.01364
- Stanovich, K., & West, R. (1989). Exposure to print and orthographic processing. *Reading Research Quarterly, 24*, 402–433.
- West, R. F., Stanovich, K. E., & Mitchell, H. R. (1993). Reading in the real world and its correlates. *Reading Research Quarterly, 28*, 34–50. doi: 10.2307/747815